

利根川圖志

20 1 2 3 4 5 6 7 8 9 130 1 2 3 4 5

あつて人佛に物をもつての心もあつて
さきからさきの子もあつてさきからさきの子もあつて
あつて古時世のこころもあつてあつてあつて
あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

百秋をなほともの川の流をたれ
とれゆへにうらたとていへし
都くこまきつとるものよりの徳を
江猪沼のちり若田の里水系
の神の依り都く神を

安藝守從五位下香取正文

生歎書

自序 卯

嘗聞有獻策者曰漕運全藉海船今
應參以河舟下諸利根川達諸江戸海
以助其不足當建一都於信之輕井澤
足其人力以運千曲川所漕之米致諸
碓氷川且其鑿石夷險抑亦有術焉山
中固饒薪藪諸石上石熱而水沃之石
如驚蝶石碎水通可以船可以筏且其

役丁夫一里一亭三里一舍肩之以送踵之
以迎勞可以逸饑可以飽又曰導海舶
於鉅子口運諸印幡沿鑿地為渠通
諸檢見川達諸江戶海可以免東海風
濤之險且沿之近徇可以墾種然亦有四
難曰人力乏也苟多役之則徒為煩冗用
帑難給曰淤泥多也旋掘旋壅曰沙土
鬆也旋積旋崩曰西風烈也歲颺沙

下流以壅則檢見川之將有後累也然
此數事皆有善處之法苟有能者將
不難云又曰斷鹿島之沙丘於其窳狹
之處則利根川之水落於鹿島浦乃
通溝渠於十二橋墾田園於十六島凡
此數者皆係利根川之事吾生其徇
不能無感姑記其所聞見以為此書
而如夫數策則興感之回以冠篇首

其是非則吾所不知故文中不及也且
吾素乏學饒有毀譽之何管馬出門
一笑大江橫

安政二年乙卯季春 赤松義知識

雪城居士後卿書



凡例

この書題して利根川圖志といふ時ハその本源の方より記すべ
き事ナギかれどそハ余が郷里よりハ遠く隔りたる境ふて考察の便
ありけれバこゝにひハ上利根川の下ある房川渡以下赤堀川權現
堂川と分れ一處より筆を起し中下利根川及びそれ流れ入る
手賀沼印幡沼等を始神社佛閣名所舊迹物産を記し銚子浦ふ終
るその間記載すべき者甚多し脱漏亦少かりず故に拾遺の舉あり
り以てこれを収めむとす希ハくハこの書を看む人各その家牒ケイワ
舊記及び考説詩歌等を齎し來て余が不足を補ひ不到を正しぬ
ハむ事を而して上利根川の方亦繼て筆を起さむとすその考察
ふ於てハ亦上武諸哲の教を期つ
編中載する所鹿島香取の如き素より大社ふしてその典故極め
て多し且前ふ北條時鄰鹿島志小林重規香取志あり又佐原の聞

人伊能穎則が年頃香取の舊記故實を正さむの志ありハ大率これ不譲りてその槩畧を識す又守谷將門山等ある將門の古迹事實ハ佐原人清宮氏年頃考索して己不上木せむとするの聞あれバこの一事ハ彼不譲り又上利根川分流一終不東南して江戸川と爲る方ハ余が友君塚玄圃下總國千葉郡五田保人年頃房總海邊圖志編述の志あれバこの一方ハ此不譲りて畧きぬ他日數書成るの後相照して可なりこの餘記載すべき事多く物産亦少からず今故不これを脱せる者あり而して又細故俚事を収むる者ハ睡魔を驅るの用のミ

近來の著書或ハ引用書目を多く一以て該博を示す然れどもその實ハ以て狹を觀す者あり夫古事記日本書紀等の國史萬葉集古今集等の歌書新撰字鏡倭名鈔等ハ諸書の通引書とすべし又惣國風土記この書世不偽撰とハハめれど今ハ伴信友が後三條院天皇の御時と考へハハる不因りて記すつ

名風土記人國記等の全國を記せるハ雲御抄名所類字和歌集歌枕名寄等の歌枕を識せる延喜神名式諸國一宮記本朝神社考神社啓蒙の神社を録せる諸國主齋録の官寺を擧るる主圖合結廢城考の城砦を載せしる行囊鈔の行路を紀せる諸州採禁記物類品隲の物産を説へる諸國名義考の名義を考へる物類稱呼の方言を聚めしるこの餘雲根志の石品鐘銘集の鐘銘集古十種の古物農具便利論の農具前王陵朝記墓所一覽の陵墓諸國里人談の奇談皆地志の材料ありぬハ無し而して今こ、不主しる書ハ地志ハ常陸風土記西野宣明訂正本の跋不常陸國志三卷水佐倉風土記一卷享保七年總葉繁録一卷正徳五年鹿島志二卷文時未北條香取志二卷天保四年潮來圖誌一卷天保十年木曾海道名所圖會卷五秋里籬島己不本曾路を記して四卷不盡く卷五波山不詣り宇都宮を巡り梁田不到る蓋その紀行あり軍記ハ將門記より歸り千住大橋金山不到る蓋その紀行あり

凡例

二

大須本端 鹿島治亂記 堀本大永六年暮春漂泊 關東古戦録 四十卷
 本あり傳を校正せし由見ゆ書言字考同作あり自序不享保丙午
 著關侍傳と有れど猶考ふべし又別ふ同名の書五卷ありこれハ
 季春朔旦と有れど猶考ふべし又別ふ同名の書五卷ありこれハ
 神説 東國戦記 賀元浪人某下總國相馬郡河原代村不居て著せる
 あり 東國戦記 賀元浪人某下總國相馬郡河原代村不居て著せる
 所あり 同一本 廿五卷一名常總軍記とハハ常陸國河内郡岡見の舊
 り 東野遺史 關脩俊明和年間の著 紀行ハ東遊行囊鈔卷十八自序
 祿丙子歲八月下旬飛國浪士江間氏親と有り行囊鈔全部百十
 一巻冠する不東遊西遊南遊越遊紫遊神風海上の目を以てこれ
 を分つ別不遊囊勝記あり凡紀行の書橋南谿東遊記西遊記 鹿島
 百井塘雨笈埃隨筆等多しと凡紀行の書橋南谿東遊記西遊記 鹿島
 紀行 貞享四年丁卯芭蕉翁作 風俗文 鹿島海道記 戊申仙臺吉村君
 作 鹿島道記 亥一卷安永八年己又香取日記 一卷寛政六年甲寅橋千
 て二種ハ 總常日記 二巻清水常陸紀行 二巻黒崎相馬日記 四巻文
 記とハ 高鹿島日記 一巻文政五年壬午高田與清著この外衣守日
 年丁丑高鹿島日記 一巻文政五年壬午高田與清著この外衣守日
 田與清著 未見 航湖紀勝 一巻天保六年己自餘ハ香取文書目録 二巻 香取四
 未見 航湖紀勝 一巻天保六年己自餘ハ香取文書目録 二巻 香取四
 家集 二巻四家とハ 揖取魚彦永澤躬國澤近嶺椿仲 勸善録 三巻高
 輔あり嘉永五年壬子伊能頴則撰ひて鶴祥十 勸善録 三巻高

著或ハ首きて二巻と 常總夜話と名づく 等ふりこの他千葉白井等の譜牒寺社の縁
 起下總常陸及び手賀沼印播沼等の地圖等援據する所數ふる小
 違あらず又巻中載する所詩歌等古今人の集不取る事少からず
 煩を畏れてこゝふ擧げず
 利根川全圖の如き巻中不書流一たれば曲直方位を正す事あ
 たはず多々地名探索のためふ其繁畧を識すのモ
 巻中の画圖名印無きハ葛飾北齋あり

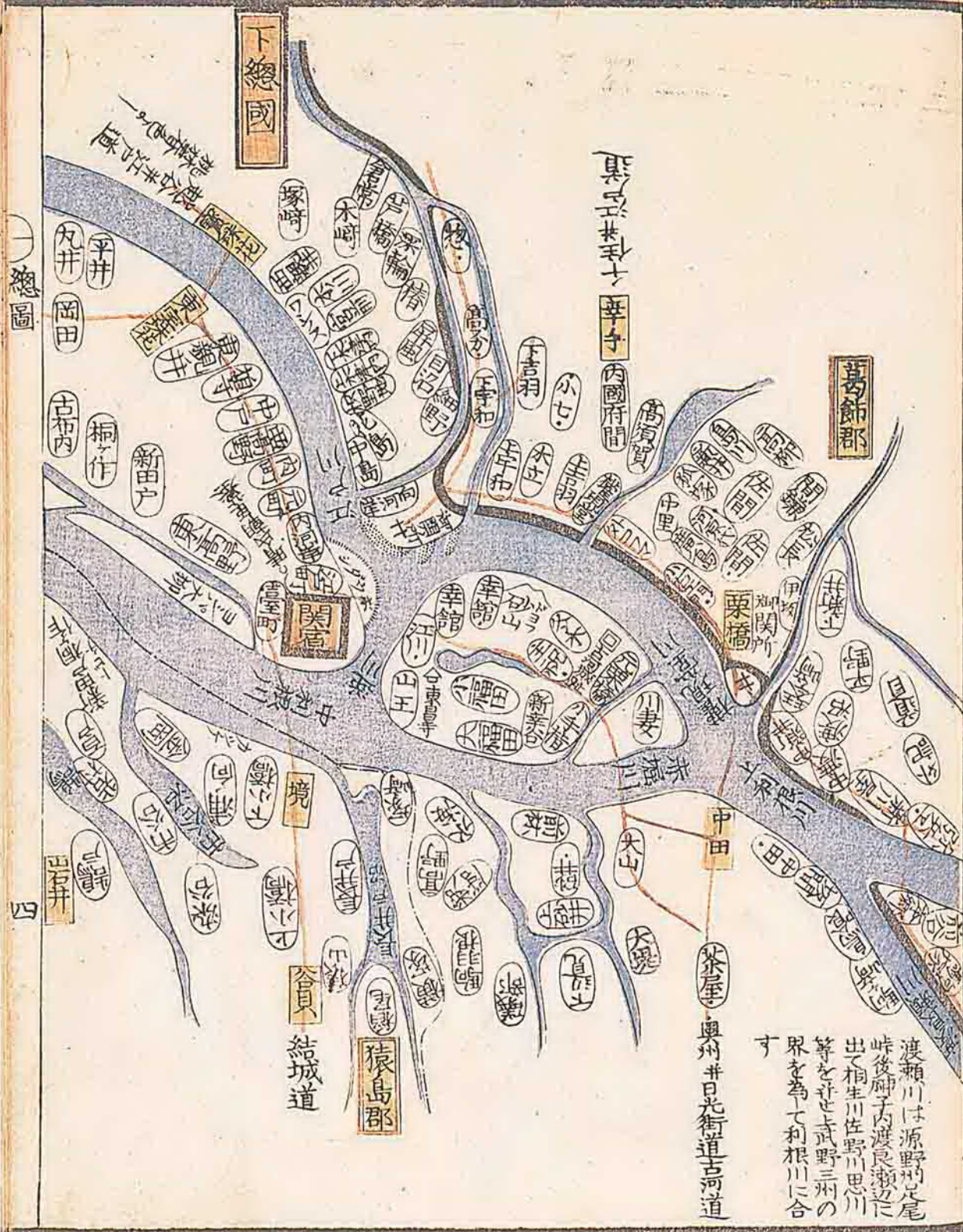
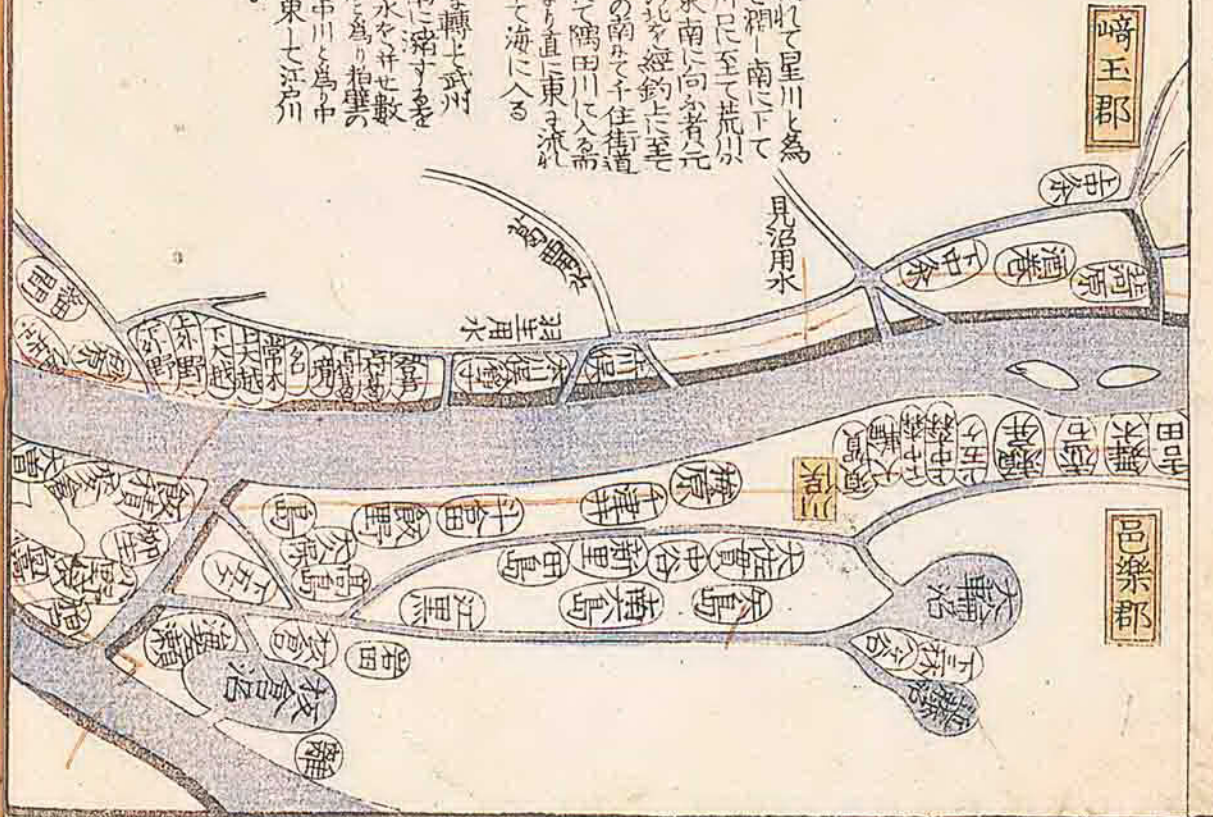


△温泉 竹堰 目橋
 戸宮社 合佛寺 〇名所舊跡 回故城
 〇陳屋 〇驛市 〇村 〇分郷 〇新田 〇竹関所
 〇陳屋 〇驛市 〇村 〇分郷 〇新田 〇竹関所



葛西用水、東に流れて、東阿轉と武州の葛飾郡に入り幸手の西南に流すを琵琶瀬と云ふ以下皇川の分水を并せ數條の溝池を分ち合て古利根川と爲り相壁の北より住街道を横きり、南で中川と爲り中田に至り海に入る而してその支流は東に江戸川と合り、堀江新田まで海に入る

見沼用水、東南流れて星川と爲り、通く時毛郡の地を潤し、南に下り足立郡見沼に入り、川尻に至り荒川と合す、而て水流の東南に向ふ者元荒川を合し、古利根川の北を經釣上に至り、鑓淵川に合り、越谷の南より住街道を横きり、南に流れて隅田川に入る、而して流は岩槻城より直に東に流れて中川に合り、南まで海に入る



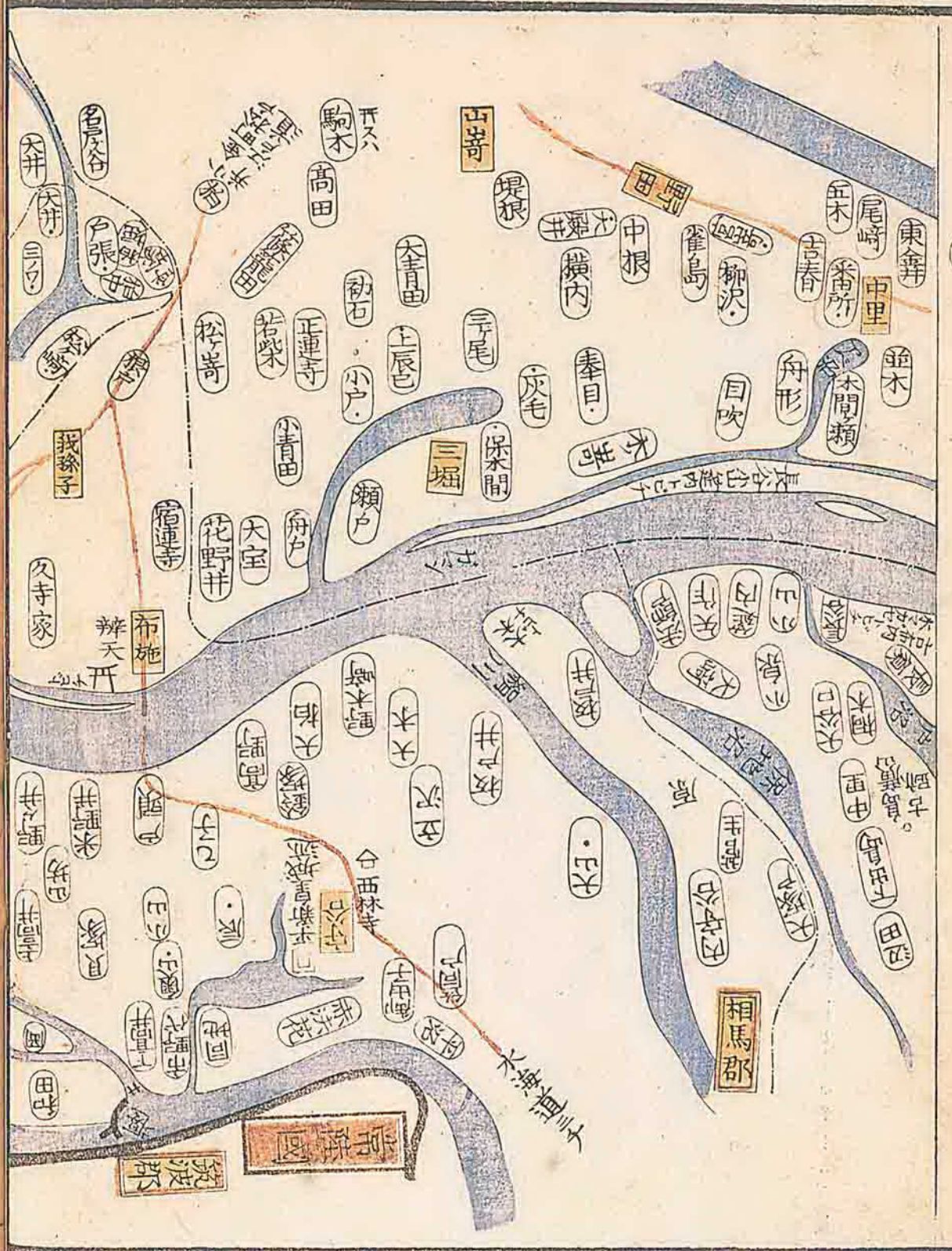
渡瀬川は源野村尾峠後神子内渡瀬に於て出づ、桐生川は野川思川等を并せ、武野三州の界を爲り、利根川に合す

茶屋 奥州井日光街道古河道

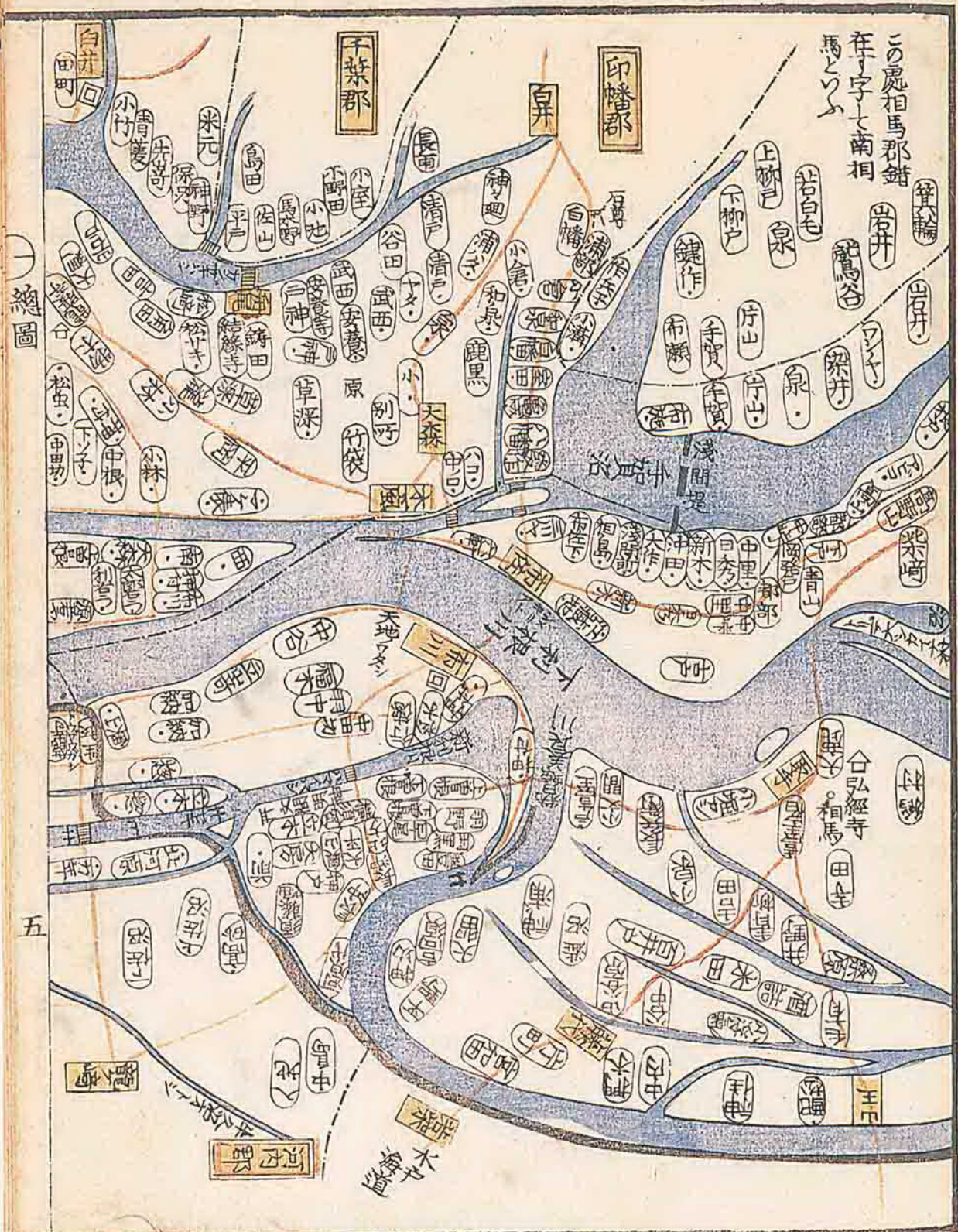
猿島郡 谷貝 結城道

總圖

四

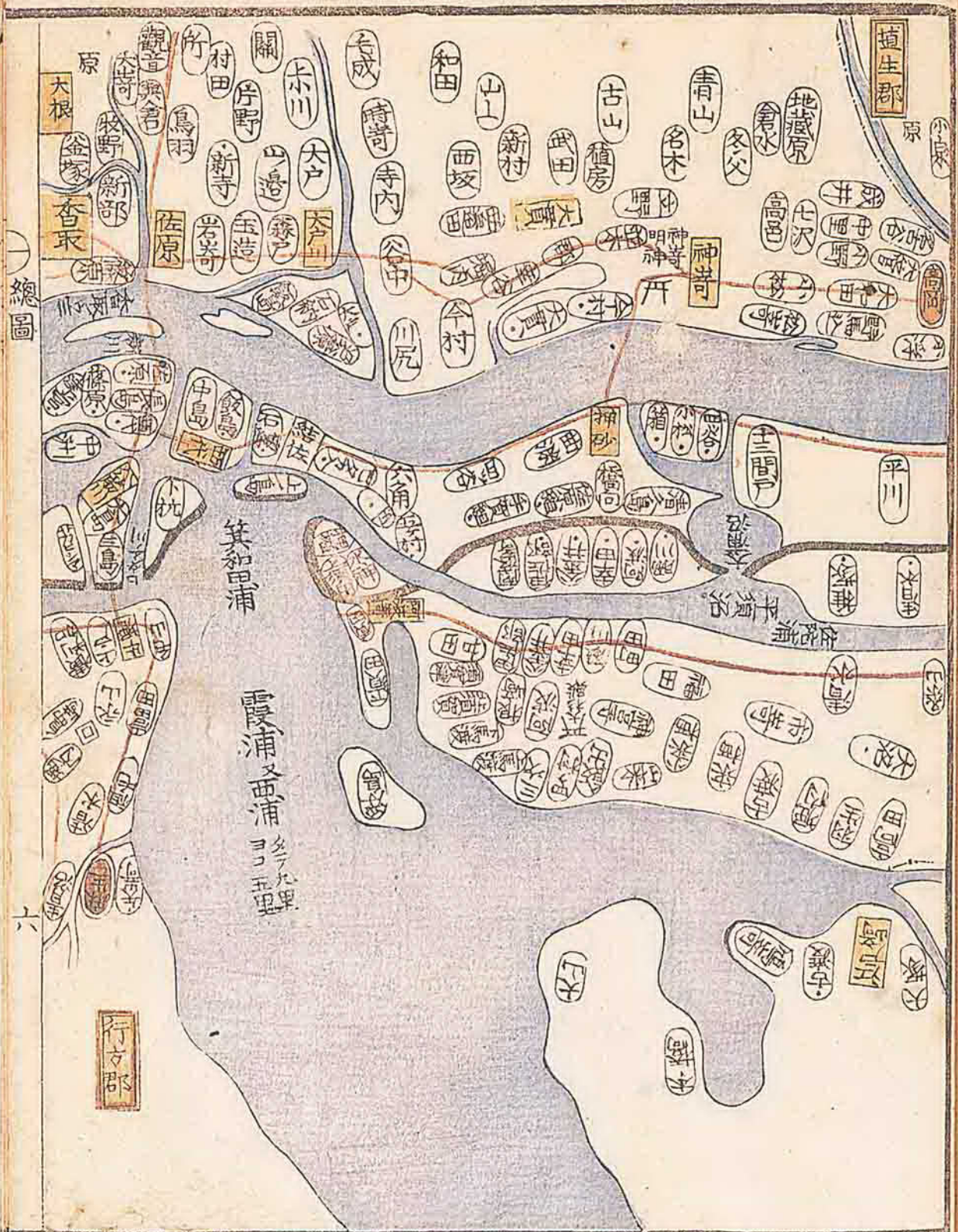


この處相馬郡錯
在字と南相
馬と



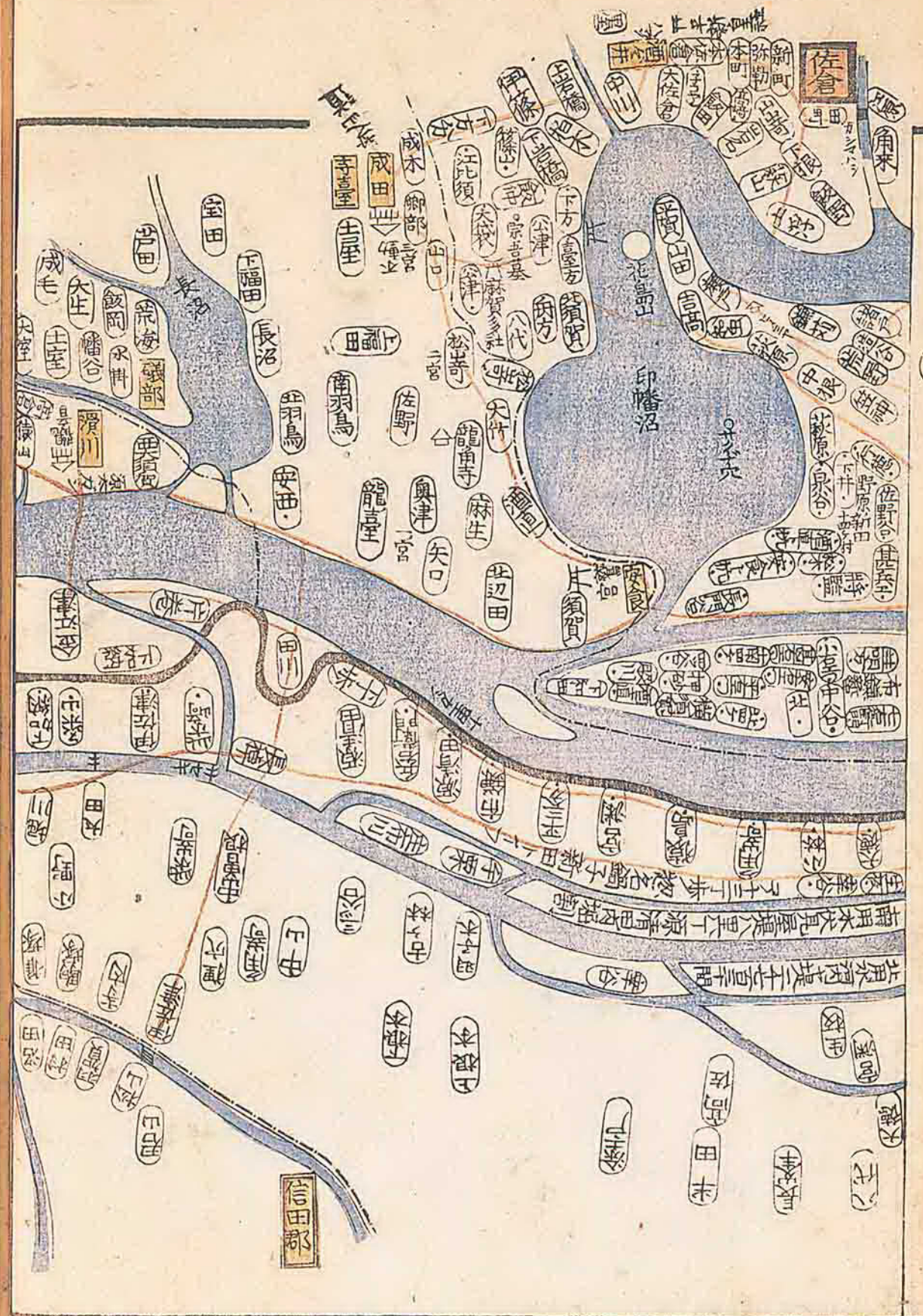
一 總圖

五

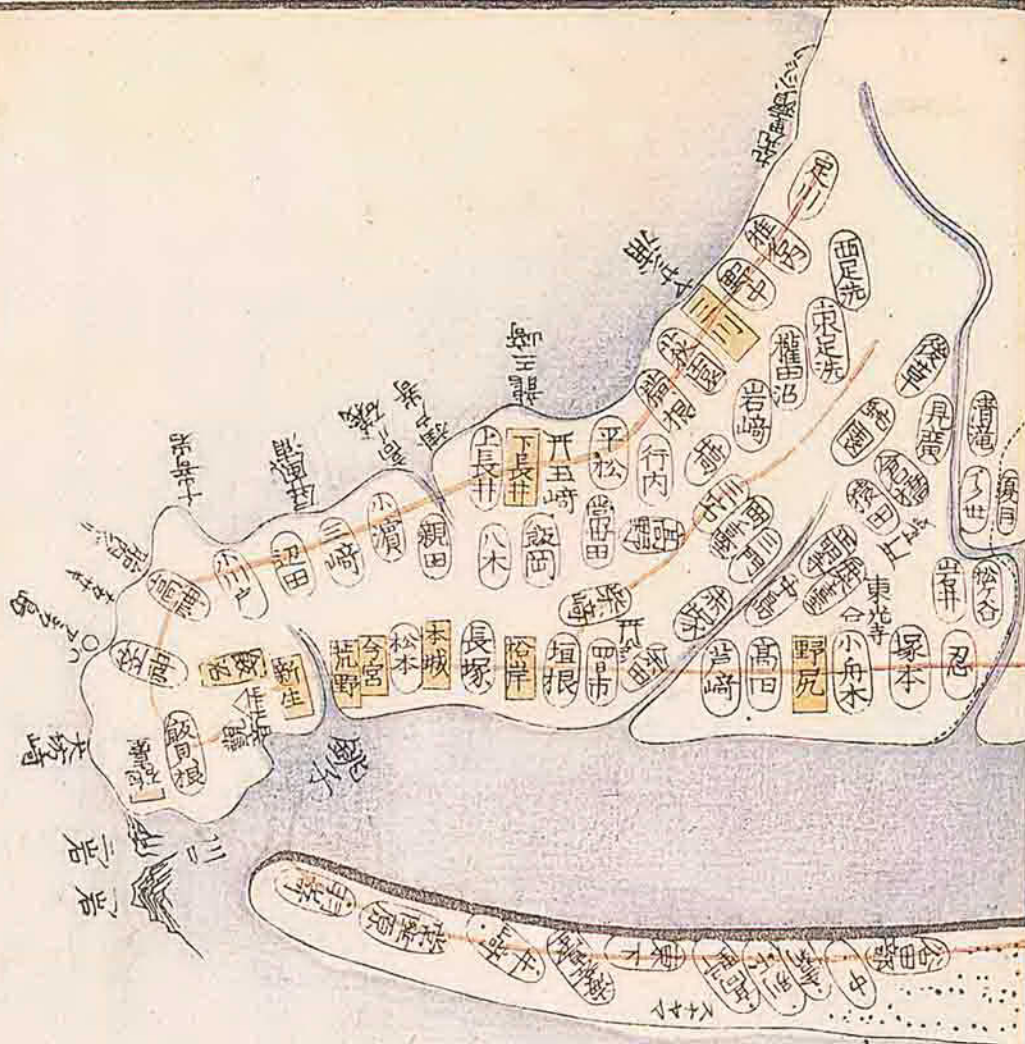


總圖

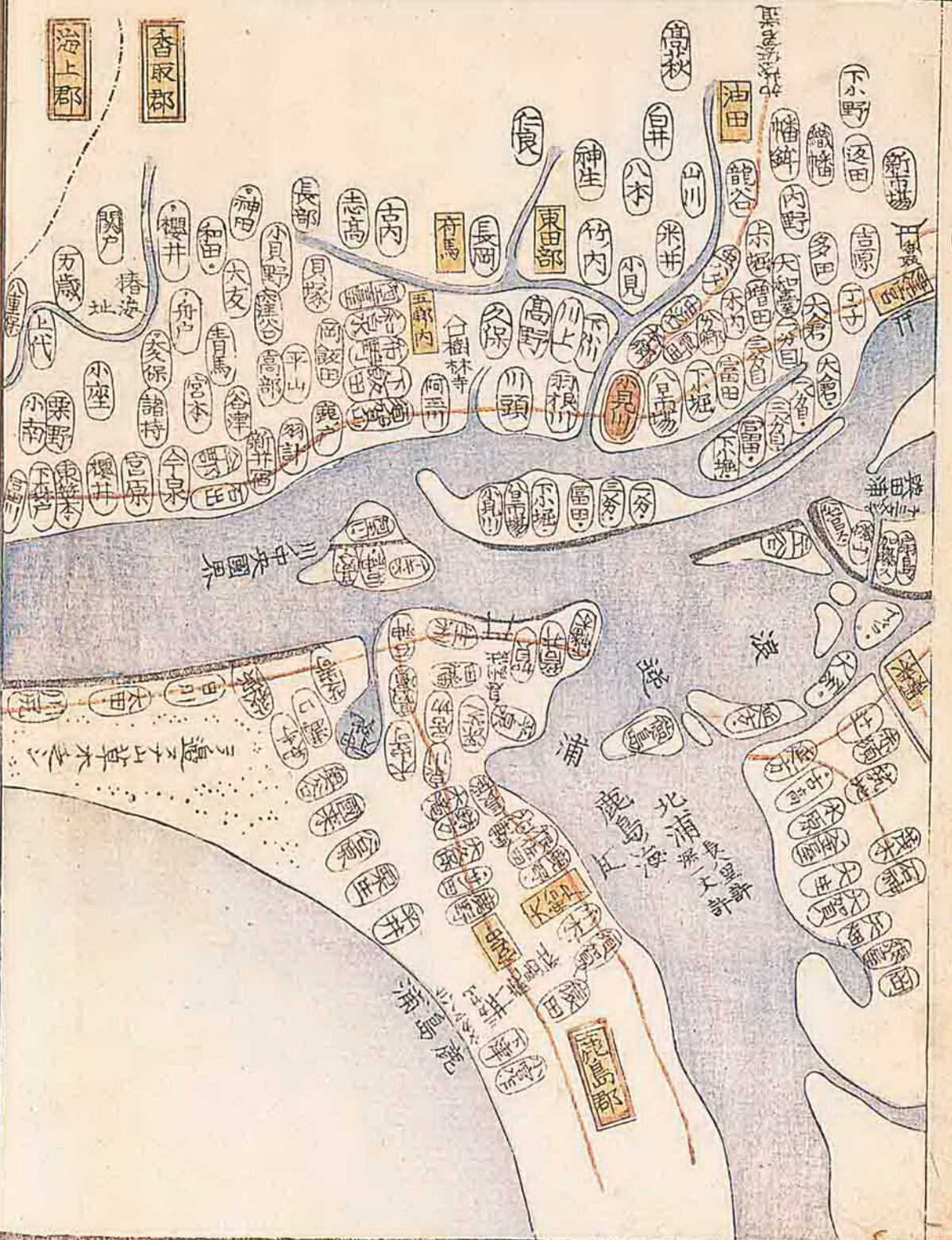
行方郡



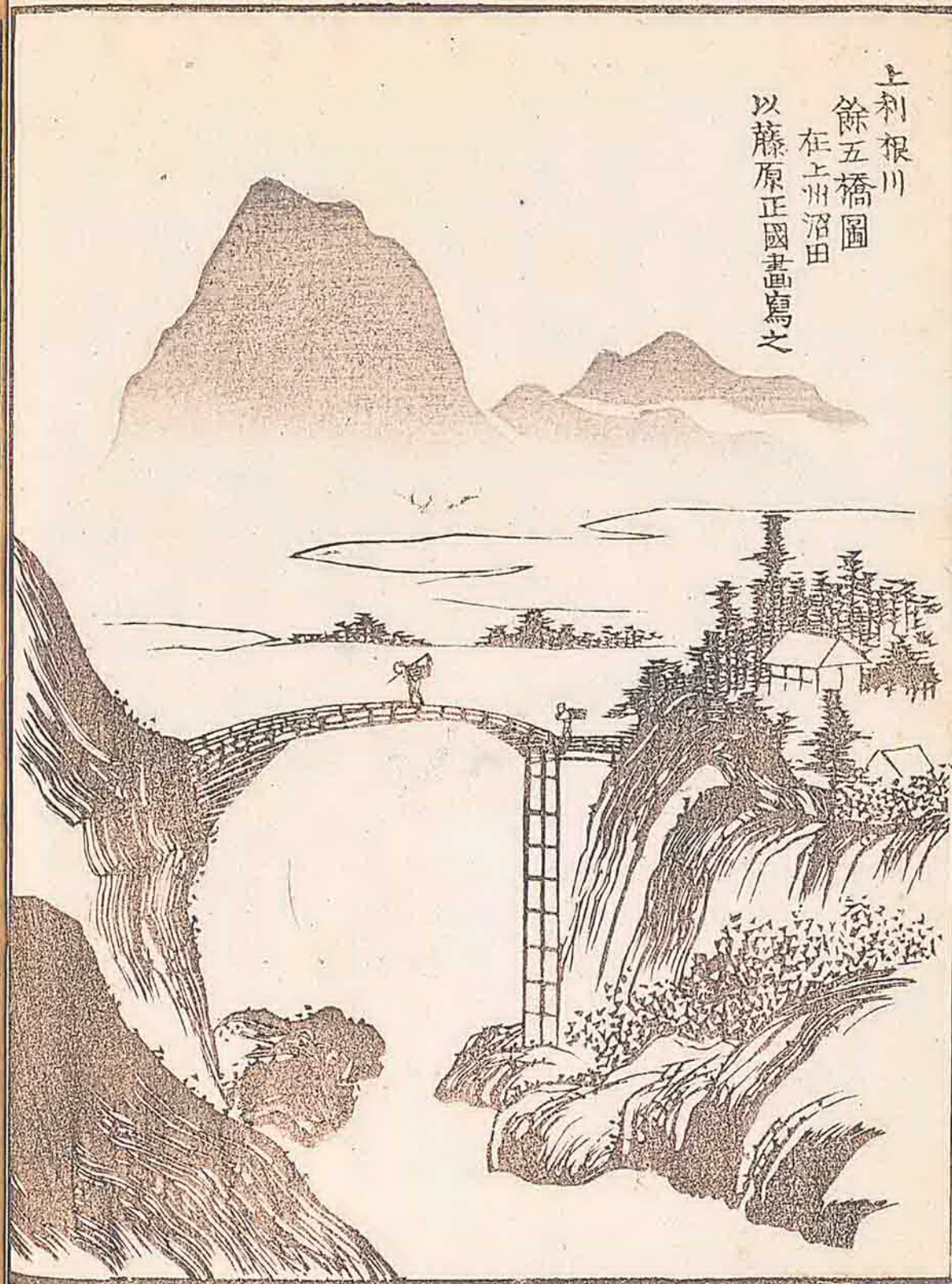
信田郡



鉦子口廣田町許宜東北風若風坤
來舟入不易
鉦子口廣田町許宜東北風若風坤來舟入不易河岸ノテ土里
從内ノ六里
中臺ノ六里
三江ノ四里
長橋ノ五里
合五十二里半



上利根川
餘五橋圖
在上州沼田
以藤原正國畫寫之



利根川圖志卷一

下總 布川 赤松宗旦 義知 著

總論

利根川は本源を上野國利根郡藤原の奥ある文殊山に發す義經

三頼朝謀叛事條不隅田川の事を言ふと此の河の水は上野

國利根庄藤原といふ處より落ちて水上遠く此の記せるは古今

沿革有れ此の川を言へり又江戶名所圖會武藏演路共

に文殊嶽より出でると言へり此の陸奥越後界ひる諸山

の脈に郡名を以て直は川名とす利根郡の名は延喜部式止

新といへり上州名跡考に利根ハ夫リタル峯多刀祢と書きとる

は固より假字にて義あるにハ非ず此の川志か上野より出で

るが上に古書に言へる所大率上野の方なれば其の方より筆を

起すべき理なれど余が郷里近き邊の事ども年頃耳目及ぶ限

書集めて持するを空やハと人の誘めより如此筆を起す事と

爲り故にて猶その源の方ハつきくまものすべき事にかむ然

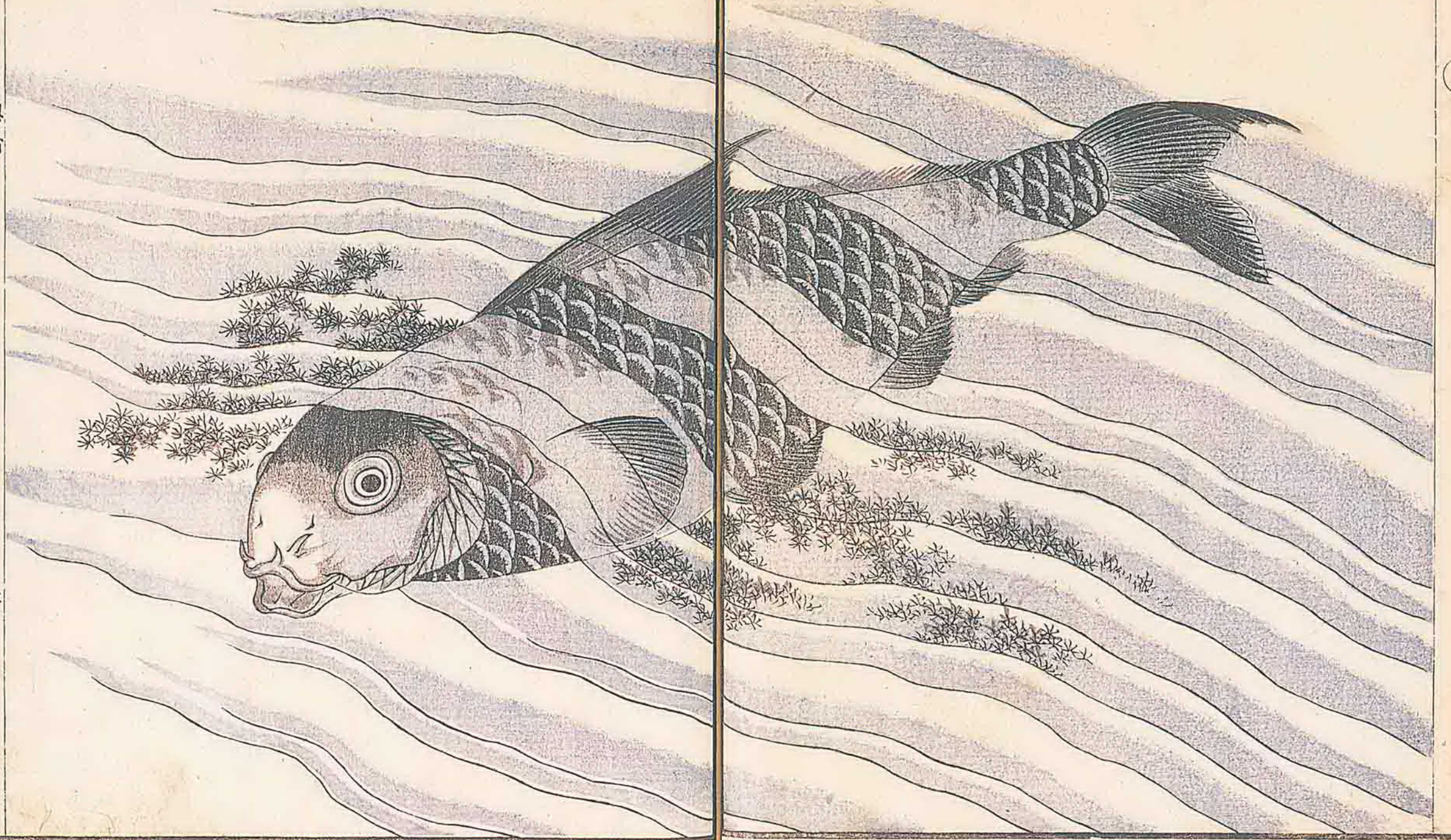
一て此の川の能く大を爲すハ細流を擇バざるを以てあり今こ
 れを畧説せむハ此の川大別して上中下の三利根川と爲す其の
 上利根川入る者ハ赤谷川發知川臼根川片科川吾妻川鳥川志
 戸川渡良瀬川等あり此の間大約二十八里有奇この下分れて二
 川と爲る其の北ある者ハ赤堀川關宿に至り再分れ一ハ逆川と
 爲り平時ハ南して江戸川入る大木の時ハ一ハ利根川の本流
 を爲し東流して絹川蠶養川を并すこれを中利根川といふ凡十
 六里有奇その南ある者ハ權現堂川關宿に至り逆川を容れ南
 して江戸川と爲り堀江に至り海に入る其の中利根川ハ益大ふ
 りて以下南ハ下總の手賀沼印幡沼長沼等を并せ北ハ常陸の大
 浦霞浦浪逆浦を容れ廣八百七十間許の大江と爲り凡二十里餘
 を經銚子口より海に入るこれを下利根川と謂ふ高小流のこれ
 不入る者數ふるは違ありすこれ其の七十餘里の流を爲し日本

三大河の一を爲して田國雜記標注利根川條ハ本朝一の大河を
を四國次郎阿波の小鳴カヘ落つる吉野川筑紫三郎筑後川あり
ハ坂東太郎と稱し古より海内七大河の其一也筑後川筑後
ハ州幅時州州川て信州より川山城阿武隈川土地を滋潤し魚蝦を生
育し舟楫を通利し人民を裨益する故あり昔桑欽水經を作り麗
道元これを注す本朝尚この撰し之し今不肖耳目の及ふ所を以
て此の書を作る其の大成ハ後の君子を待つ

刀祢河泊乃可波世毛思良受多々和多里奈美尔安布能須安敝
 流伎美可母

萬葉集卷十四上野歌
この餘神樂取物歌新勅撰古今六帖夫木集等ハ詠ミ入れざる
歌多かれどそハ皆上利根川の方ハゆづりてこハハハ
 刀禰棹歌 市隱草堂集 安達脩

刀禰河邊多緑楊 嫩枝如縷拂堤長
 揚帆不管分離思 明日春風入武昌



二の餘近世人の詩歌最多一六率江戸川の吟あり故に
君塚巖が房總海邊圖志に譲りこゝに一首を擧ぐ
夕立や浪を研流す刀祿の音

坂東の一番蛙や太市河

輕舟 水樹

運輸

夫舟楫の利ハ以て不通を濟する物あれば天下の利器これより
便あるハ無一これ河海の大入人益ある故なり利根川は在て

ハ專航船を用う三代寶錄卷四十六元慶八年甲辰九月條十六
長三丈一尺廣五尺二艘長二丈一尺廣五尺二艘長二丈廣三尺送
神泉苑と見え船渠容反古亦作舟今案和名鈔卷十一俗用高瀬船
艇小而深者曰船渠容反古亦作舟今案和名鈔卷十一俗用高瀬船
と見え船渠容反古亦作舟今案和名鈔卷十一俗用高瀬船
言卷九の小而深者謂之深船即長無音竹といへり今河身
高タとありゆくに高瀬舟ハ深かり因りて想ふ年ごとハ今河
三才圖會卷三十四に船俗用高瀬字今舟形稍異按京河原流至伏
見呼曰高瀬川其船長二丈余似船といへり見米五六百俵每
考ふべし尚高瀬舟の事諸書に見えり此と見米五六百俵每
二斗を積む者常あり舟子四人を以てすその六ある者ハ八九百

俵を積む舟子六人を以てす百俵積以下をバウテウ釋名卷七下
日艇艇挺也其形徑挺一人二人所乘行者也といへる和漢度量の
差あれどこの字當れり又和漢三才圖會卷三十四は天船あり
物ありといふ急事の備あり舟子一人を以てす公用の船を御用
船といひ諸侯の御手船を御船といひ他の船を以て貢米を運送
するを御雇船といふ雇船あり御船の他ハ賣船あり運賃ハ米百俵
の重を百匁と一薪材をもこれに准へて百匁は銀若干といふ猶
遠近は因て差あり薪材の重ハ船の喫水先銚子口より關宿の上
りそれより江戸は下るを利根の直船といふ荷物ハ大槩乾鰻魚
油あり常陸の北浦西浦より出づるハ米穀炭薪材木等あり印幡
沼衣川上利根川亦同長沼手賀沼ハ入樋ありて船入らず蠶養
川ハ大率竹筏多御用の外ハ舟人字にて川盗といふ船を御雇の
入るあり考ふべしこれらの諸物を江戸は輸一更に鹽等を
積みて各處に歸る此の如く諸州の通船一處に湊會して布帆は

白鷺の往返するが如く釣艇ハ緑鴨の來去するに似たり實に利
根川第一の眺望あり
水涸れて河身高さ時ハ航船通せず故に脚船を以て運送すこれ
を鰲下船といひ鰲ハ俗ニこれを業とする家を鰲下宿といふ又舟
子少き時或ハ洪水不逢へバ土人を雇ふこれを業とする家を引
付宿といふ共に處々に在り
銚子浦より鮮魚を積ミ上ずるを鱸船といふ舟子三人よて日暮
は彼處を出て夜間二十里餘の水路を洩り未明ニ布佐布川
に至る特この處を多しとす故にその賑他處ニ倍一人聲喧雜肩摩
踵接傾くる魚は銀刀を閃一鉛錘を投し桃花を散し箬葉を
翻して一時の佳景と稱するに足れり而して冬ハ布佐より馬
駈して松戸通よりこれを江戸に輸り夏ハ活舟を以て關宿を經
て日本橋に到る以て小民市人の饒を愈し以て公子王孫の祭を
を博む又常陸の鹿島浦より來る鱸船希ふ有り又あまりふ一乾
魚は舢艇不て輸るあり

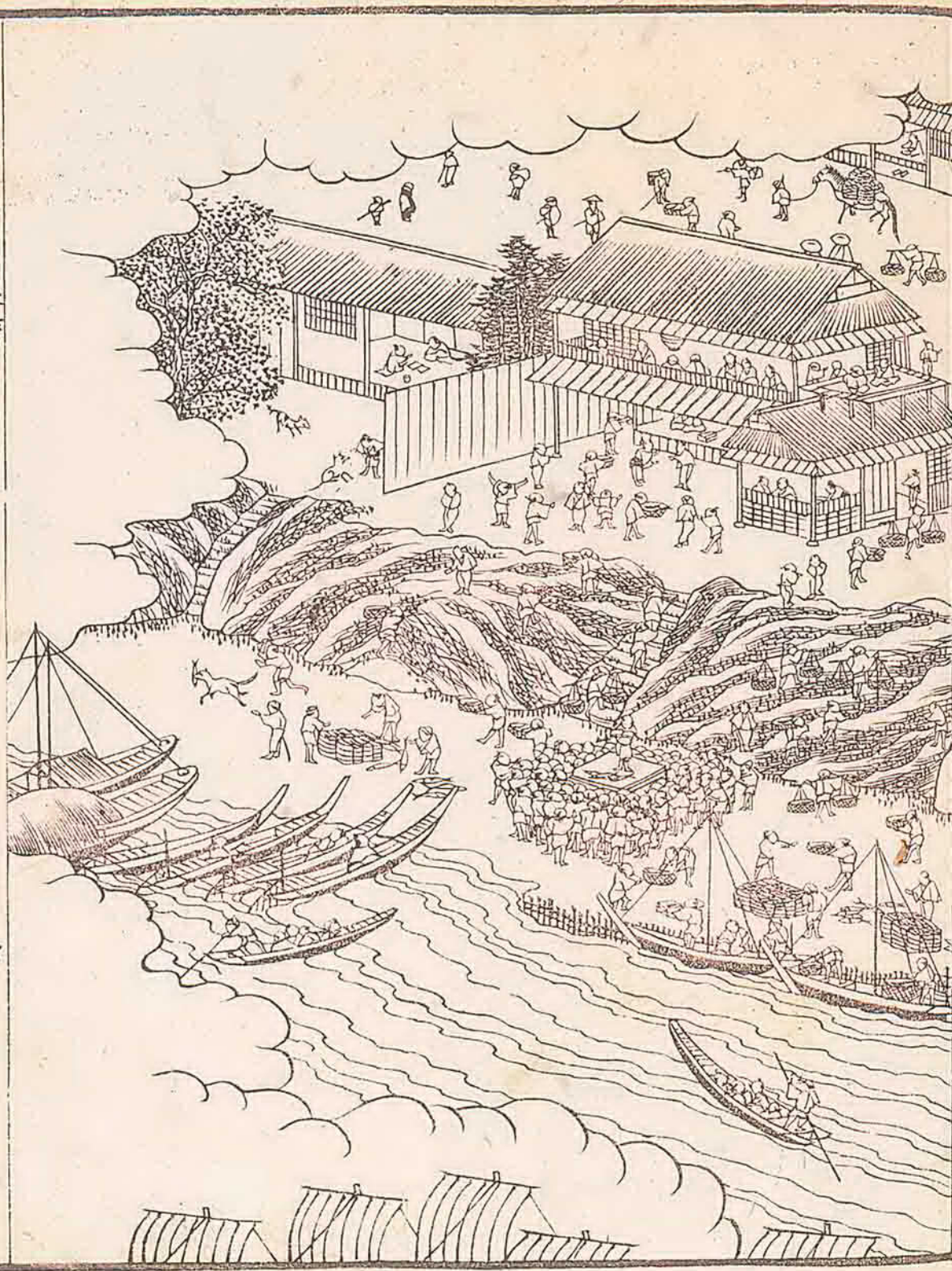
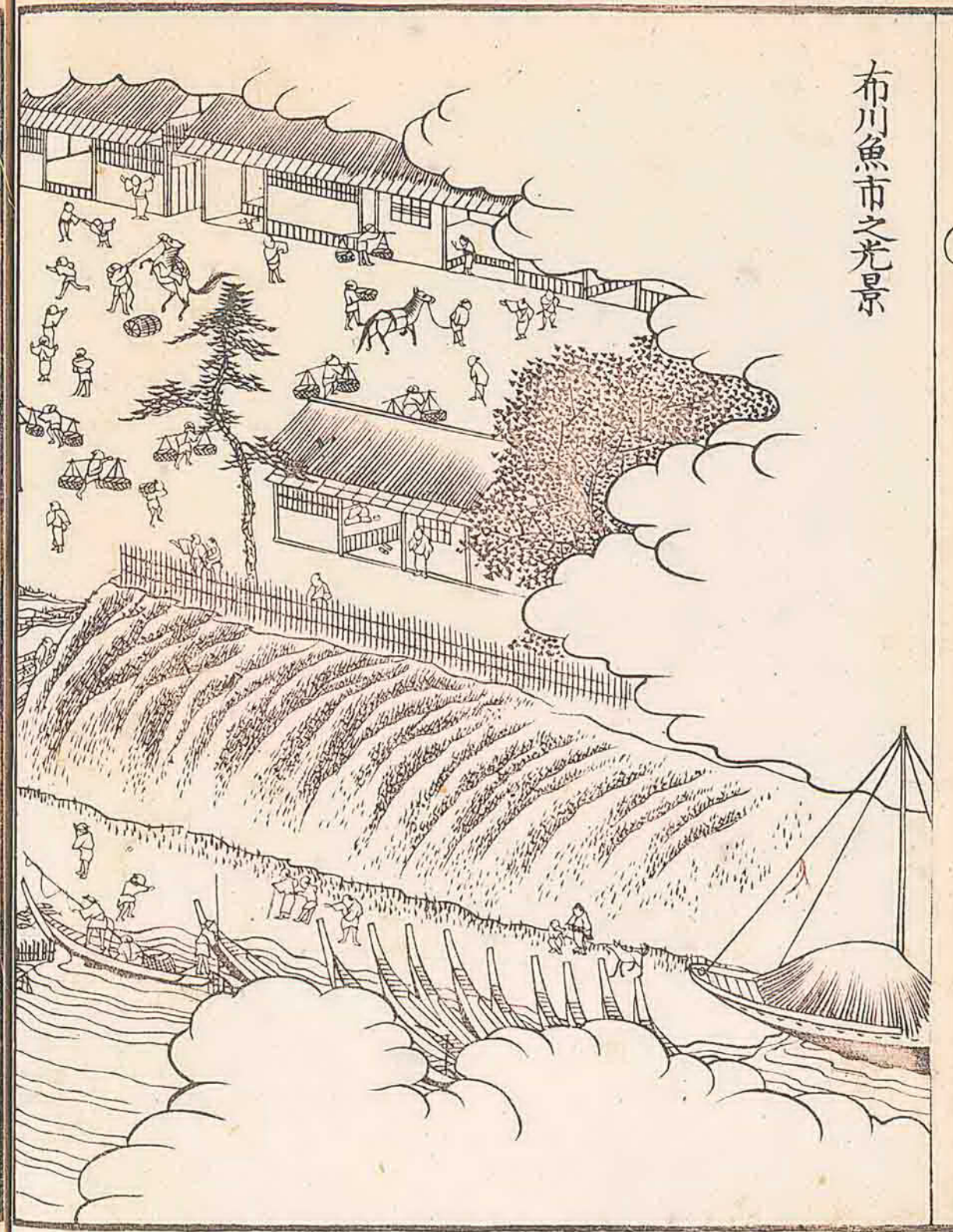
天候

舟人の最慎む所ハ天候不して就中暴風を前知する不あり而
て迅く帆を下け苫を覆はざれば或ハチノモノ沈木の方言あり
三秀才洞庭湖の楠木神と不乗りうけマン子川の彭蠡湖の宗
不抵りて舟を損し柁を断え若ハ人命を殘ふ不至るを以てあり
故に練熟の舟人ハ掌を以て舷をおきて風雨を知る
黒雲急不起るハその方より暴風來る徵あり曉不黒雲奇峯を爲
すハその方不風行くあり東南風ハ晴ふて西北風ハ雨あり然れ
ども時節不因て差あり

日光山よく晴れたるハ北西風あり
北西風又ヤマデヒハ日曇
りたるハ雨徵あり筑波山よく晴れたるハ北東風あり筑波オロ

天候

布川魚市之光景



天候

六

雨日ハ晴微トす富士山ハ黒雲あれば西南風ありこれをフジ
南西風ハフジ曇天ハ富士山のミ晴れると西南風あり
鳥飛下るハ必風ハ向ハ是を以て風の方角を知る

魚高く跳るハ雨低きハ晴あり
耳痒きハ晴の微あり 鯉ガとれるといふハ晴日の續く故あり
星光揺クハ大風の微あり

天經或問云夜星燦躍參星動搖太白晨見此皆風微或繼之雨也
この參星ハ二十八宿の中にて尤見易き者あれば舟人これを認
めて準トす故ハ方言多ク物類稱呼卷一ハ參ハ二十八宿の内ハ

り中星の横一連りハ三の星を江戸にて三光といひ又三星と
いハ關西にて親荷星といハ東國にて三ちやうの星と呼ハ今按
所の音武藏國葛西にてさむろ不といふといへり上原氏藻汝
草ハ蝦夷方言を記してヲガンチといへると是あり

參星ハ續きて準トする者ハ昴宿あり物類稱呼ハ昴ハ二十八
宿の内東國にて九曜星といハ江戸にてハ六連星といハといへ

り蝦夷にてハイロンリコフハといハ
太白星ハ宵の明星蝦夷にてキンマチスルクルといへる方長庚

ハ一て曉の明星ニシヤツシヤヲチといへるハ啓明あるグ共に
金星の別名あり

雨候の事黃子發ガ相雨經ハ常以戊申日候日欲入時日上有冠雲
不問大小視四方黒者大雨青者小雨といへるより始諸書載する

所甚多一姑一二を左方ハ擧ぐ
武備志卷一百十八ハ海燕忽成羣而來主風雨鳥肚雨白肚風ま

海猪亂起主大風といへりこの海燕ハ胡燕の類あり觀文禽譜下
條ハ一種高須候ノ藏圖ニ海中巖壁ニアル所ヲ畫ケリソノ形狀

頭臆蹙色ニ蛇頭ニ似タリ背及ビ翅黒ク翅最長シ翅ノ裏蹙色
嘴短ク尖微勾レリ口廣クノロ中義楚六帖卷十七ハ攝大乘論
紅色脚蹙色ナリといへる者あり

云少受猶如乞雨鳥西方有此鳥如此方鳩鴿等同と見えたるハ即
この類にして水乞鳥とハ異なり水乞鳥ハ廣東新語ヨ
物理小識卷二云熊公曰竈突發煙平遠望之亭々直上晴之候也蛇
蜒而起如欲上而不得者雨徵也蓋雲將成兩空中氣行皆成濕性煙
爲濕礙不得上升故至宛曲將雨礎潤將雨燈爆理可同觀朝日出尅
黯淡色倉白者雨徵也日出時雲多破漏日光四射者雨徵也密雲四
布牛羊齧艸如常者不雨若啖食匆遽似求速飽雨徵也蠅蚋蚤蚋
邊啞食雨徵也蠅蝟之屬倉皇飛鶩雨徵也穴處之蟲羣出于外雨徵
也下器
天經或問卷二云如頭痒耳熱面赤髮潮體燥肢痛鳥雀翻飛噪空圍
舞魚出跳躍羣蟻出穴蚓過路蛇曝日石脉潤樹汗流琴聲不清鼓音
不亮燈燄搖閃燄爆有聲此皆風雨之先徵也
物産

利根川に産する魚鳥及び兩岸に生する草樹極めて多しその主
たる物江戸海に入る方ハ鯉を以て一銚子口の方ハ鯉魚を以て
すこの書余が郷里を先とするを以て爰に鯉魚を説きその餘の
物産ハ粗これをいふ
鯉魚ハ朝鮮名にして東醫寶鑑卷二十一に見え日觀要攷よと鮭
魚と注せり鮭ハ和名鈔卷十九に載せたる鮭の誤にして本義ハ
フグ山海經卷三赤鮭の郭注今サケは非ずされど通用に
ハ鮭を用ゐると可なりある儒者よりフグの可否を問ふとて鮭
の思ひて可と答へたるより食ひて中先哲或ハ鮭魚松魚過臘魚
り困ミ一事の能く知りたる談あり先哲或ハ鮭魚松魚過臘魚
さど書くるハ非なり又この魚功能多し粗左方は擧ぐ
無住法師雜談集卷三云聖武天皇東大寺御建立アツテ三面ノ僧
房ニ學問スル僧ヲ夜中ニ田舎ノ夫ノ形ニ御身ヲマツシ蓑キ給
ヒテ御覽ジケルニ或僧アスヨリ後ハイカバスベキト歎キケリ
物産

サシノゾキテ何事ヲ御歎アルト問ヒ給ヘバ此日比鮭ノ頭ヲ舐
リ舐リシテ學問シツルガ舐リ盡シタリトイフナド、問ヒ給ヘ
バ鮭ハ目ノ眠ラレヌ物ニテ頭ヲ舐リ舐リシテ目ヲサマシテ學
問シツルト云ヒケリサテ越前ニ鮭庄トテ鮭トル庄御寄進アリ
ケリコレ學問ノ爲ナリ

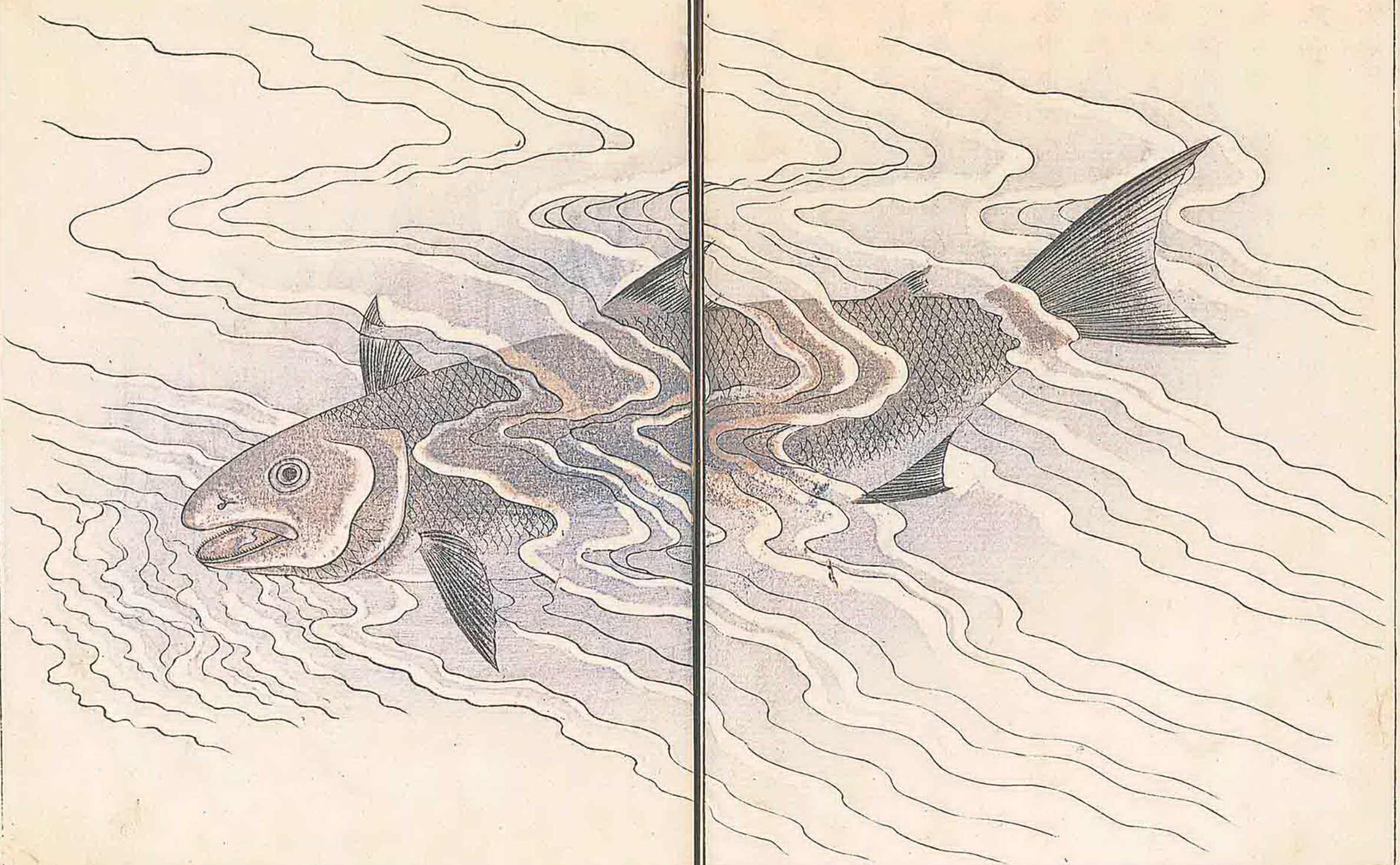
一本堂藥選下編云乾過臘魚温體破瘀血治婦人腰冷血閉產後瘀
血諸疾發諸瘡瘍及衝氣結毒

又云此邦中古醫人必處過刺葛刺葛氏等數品稱調血劑舉治衆疾
葛刺即乾過臘魚是也今也方法並失幾少識之者用者亦至稀只煮

食滿腹耳嗚呼其温體破血之効迥在芎歸之上古人用之其有旨哉
和漢三才圖會卷四十八云產後金瘡藥 干鮭 阿羅魚 共黑燒
藜 萍蓬草 小角豆 沈香 以上六味分量有口傳

松浦弘西海雜志卷二云牛深湊ハ天草の西の果トテ南ハ薩州

長島と海上纜ト三里許を隔つ西ハ滄海渺茫トテその限を知
りず予この處ト一宿を求めトその家の爐上ト何トモ知れぬ
枯魚を梁より繩トてつりさげ煤ト黒トト見えざるを怪
て主人ト問ひト一鮭ありト答ふるト所ハ漁者のトあるト
かくまで陳く畜ヘおうるト事不審ありトいふト主人曰くこの
濱ト鮭を得る事甚稀ト一ト漸五年十年目ト一二を捕ヘ得る
事ありそれを此の如く貯ヘ置く事ハ金瘡火傷の藥ト用ゐる
りト程年久き魚トても火トて炙れば油自湧出づるトありこれ
を疵口ト塗傳るト効能神の如く痛を止め肉を生ず故トこの里
ト偶捕得る時ト一尾を五軒十軒ト分畜ふるトありト乃ト
おろさせて熟く視るト北國トて漁りトる者ト少ト異かる所ト
ト北海邊トてハかゝる能ト聞クトさりト西國ト來りてその奇
効を知得トるハ奇ありトいふト



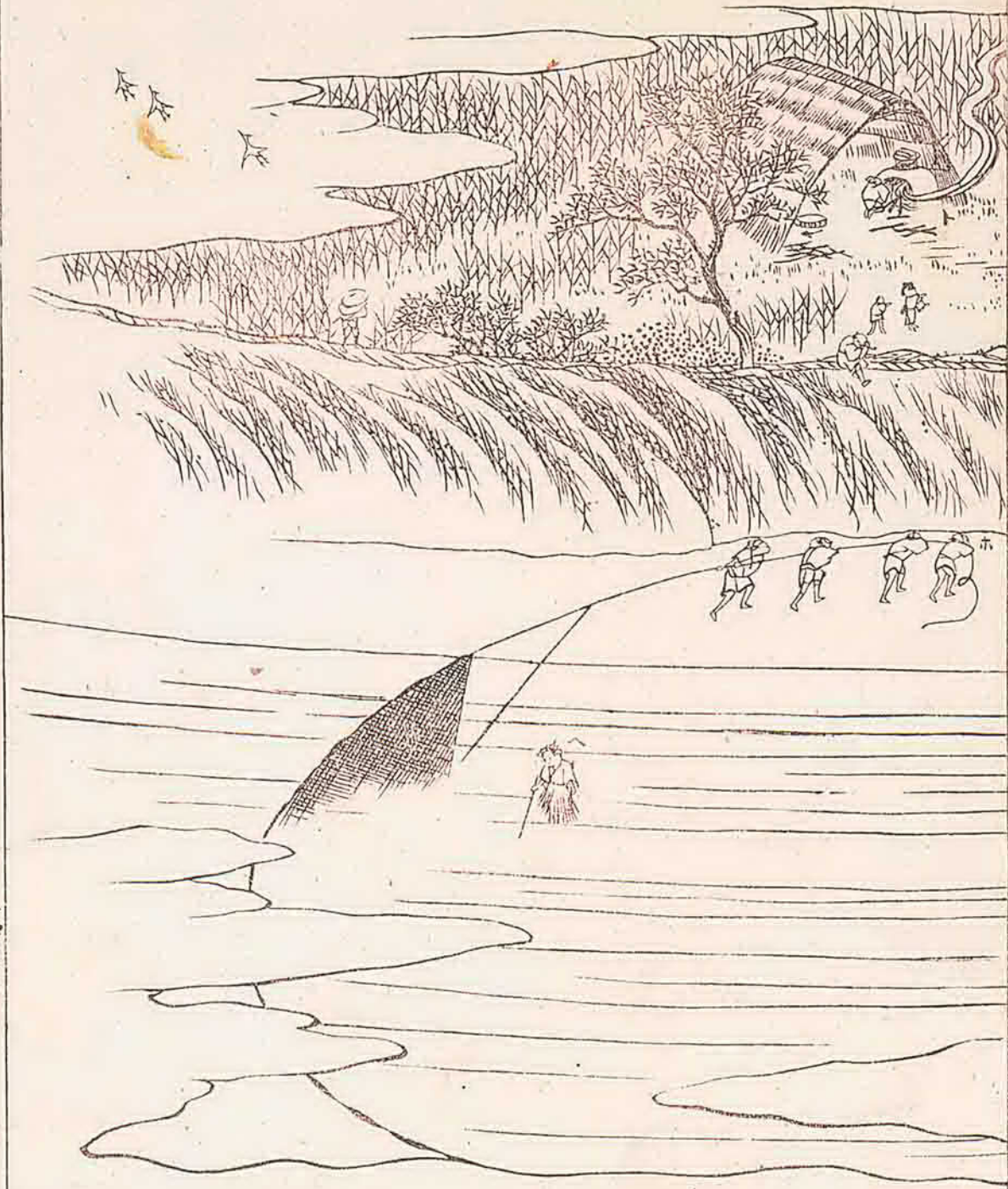
子道遊篇不朝菌不知晦朔亦必謂朝菌之蟲蟲者微有知之物故以
の事とて此云不知晦朔之物何須言不知也訓爲芝孳母上蟲邪同
知不知言之若草木無知之物何須言不知也訓爲芝孳母上蟲邪同
菌者失之矣と廣雅疏證提要卷四十蛾條不考かべ一孳母上蟲邪同
白露蟲爾雅翼霞姑霞とせる能改齋漫錄の誤を正すある物を
り一書不この蟲出づる時速舟を乗出さし中不て藁火を焼く
時ハ悉くこれ不聚り羽を焼かれて落つるを採りて香餌と爲す
時ハ魚多く得りる、といへり

鱧魚の漁始まる時ハ鴨跖草雞兒腸の花兩岸を點綴して秋間の
美景と稱する不足れりこの他動植の記載すべき者甚多し
ヨシタケ蘆を刈りたる濕地の芟株不生す乾地ハ生せず蓋狀
獨立色白一或ハ黄を帯び或ハ微黒を帯ぶる事あり四月多く生
む味朴樹菌の如し又乾して貯ふる者あり即本草の萑菌あり萑
ヲギかれど散文よて按ずるに説文卷二不突菌突地萑叢生田中
通ハいふものろ 按ずるに説文卷二不突菌突地萑叢生田中
从六聲とある文の繫傳不從中者象三菌叢生也易夬卦曰覓陸

夬夬陸卽突也與覓皆爲柔脆之物陸字從此といへるハかゝる物

不してさる處の漸固まりて平地とあるから不陸字これ不ハ
るあるべし陸ハ説文二十六不土塊陸陸也といひ陸ハ同二十八
不高平地と注せるも漸不成固まる狀不因れる者又四月頃蘆
不かりざるを刈り積みて田に培せむとする者雨不朽ちざる
が上生ずこれハ色味全く同じにれども朽ち易く貯へ難し
惠具は古より説々有りて詳ならずこ、不井ゴといふ草黑白二
種有り白井ゴハ野茨菰の小ある者その根ハ發くして食ふべし
りずされどその葉ハ食ふべき狀ありさらハ惠具ハ發の義さる
う黒井ゴハ烏芋の小ある者即救荒野譜卷上の野芋芥あり救荒
卷八の水豆兒ハこれ 亦二種有り水氣多きを米井ゴといひ少き
かる未詳ありず 亦二種有り水氣多きを米井ゴといひ少き
を糲井ゴといふ共に味甘し

小々妻芽に似て小かり原野濕地不生す葉中不脊あり長三尺許
秋枯る採りて糲まき苦不製る一名廿、三ノ 大和本 卽爾雅義疏
物産 十三



鱈魚大網の圖

網を舟に積三棧入高入船頭に糝入網打二人大率
 五人かて舟を走らせ川より網を打廻しよりさけを回し
 岸小浴して下り川下を引廻し一傍の砂と引きあはせと
 るより網長七十間より百間に至り幅八九尺より至る
 此は川の浅深廣狭に従ふなり

一魚屋網元

する處なり

二棧に網を纏ひて引くなり

ハ網船

口は蘆原の中かすりか人行を通

水網を挽き畢つ後或ハ網中にナリ

取つてさけを打つ

ハ手に棒を持ち網さかりたまきけ

の頭を打つ

ト食を調ふる小屋

の類絲廷るふあり爾雅卷八不類蕭董とある文の義疏不廣韻云菘茅

類絲廷野人刈取為素柔難斷其葉如茅而細長有毛而澀

式祝詞の川菜ハ倭名鈔の水苔卷十七和名加波奈立成云水苔一名古

今集物名歌のかハかぐさと同物トハ見之されど何の物トモ知

りれず然る不平田先生ハヒルモありといへり老か思ハるハ

清絢が孔雀樓筆記卷四湯火傷ヲ療スルニヒルモトイフ物ヲ

砂糖水ニテトキ傳クル用井試ムルニ神効甚シ伯氏ノ乳母大ニ

火傷シ面腫ル、ト甚シク眼口モ見エガルニ至ルカノヒルモヲ

傳ケタレバ一夜ニ痛止三腫減ズ兩日ヲ經テ全ク平生ニ復ス一

通ノ湯火傷ニハ一塗ノ晡ヲ待タズノ愈エ世ニ澤山ナル物カク

ノ如キノ至効アリといへる話よ一有りてきこゆ十六島邊不て

疵不傳ケ用ルも由ありすべて神代のこの草余が卿不てハメ

故事を荒唐と思ひ捨つるハ狡意ありこの草余が卿不てハメ

グスリッパといひて田を耘ル者大率採りて腫貼一目を明不一

熱を去るといふ物類稱呼卷三云眼子菜畿内及び北越不てひ

てびりこといふ奥の津輕不てびり物トいふ田夫採りて腫の腫

ふをる物あり救荒本不さトもト有リ實不さノ葉不似トり

又食傷を治する事諸書不見之り救民如藥食傷并毒解條不羅

り右陰乾不一粉不一て用う鍊を忌む磨不てひくべ一ト見ゆ

把葉湯をあげて若欲吐不吐者ニハ加ヒルモ草ト漢名麩舌本草

酸模附録不出づ救荒野譜通解眼子菜條不六月コノ嫩葉ヲ採り

陰乾シ末トシ服スレバ食傷宿酒ノ醉ヲ解スルヲ妙ナリ又藍芽

ト加ヘテナホ良シ麩舌ノ功用相同シ故ニ充ツルナリ眼子菜救

野譜トいふさる由ある草かレハか、る効も有リけるう

鷺尻刺和名鈔卷二十不混一説ひとれど余ガ卿不て見さる

ハ一名尻刺草針草トいひて藺より小く且軟あり萬葉集卷十七

湖葦交在草知草トいへるとこれあるべく覺ゆ

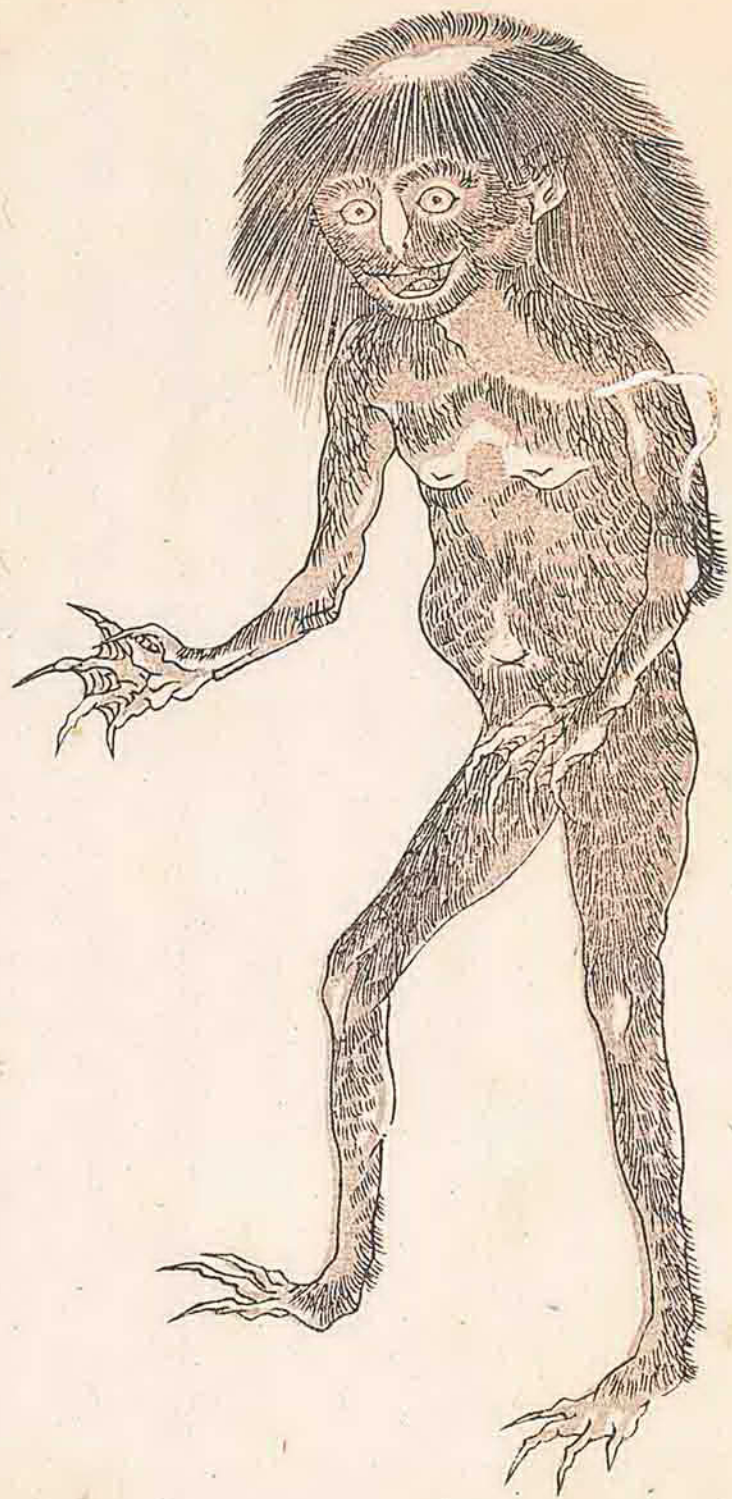
物産

十七

の時多く上る形銀魚の如くにして下喙尖り長し身長六七寸喙一寸許銀光あり脊骨黒く見ゆ八丈島にてフツチといふも是かるべし

カッパといふ物本草綱目の水虎溪鬼蟲附録かりといへど正しく當れりとも見えぬ逸周書王會解不穢人前兒良夷在子とある文の注小在子ハバツ斃身人首脂其腹多之霍則鳴曰在子といへる物やそれちりむそハとまれかくまれ望海毎談ふ刀祿川ふ子、コトといへる河伯あり年々ふその居る所變る所の者どもその變りて居る所を知るその居る所ふてハ人々も禍ありといへりげふカッパの害ある談多し牛山活套中巻不筑紫ノ方ニハ河伯ノ邪祟多シ金銀花ノ煎湯ヲ用井テ神効アリといへり試むべし

手指を截断しざるを接ぐ藥の方をカッパより受けるといふ事いかでと思ひしが若ハさる事とや有らむ一事左に記す堅瓠廣



集卷六云。耳談。黃陂江尉解銀赴京。遇盜截去二指。抵京已五日矣。延醫但求已痛。有仇總戎門下醫人曰。是可續也。斷指幸爲從人拾得。卽取合之。層々塗藥。仍夾以薄板。戒三七日勿近水。及期果合。屈伸如故。但有紅線痕。傾索得三十金。酬之兼有其方。用片腦象牙末降香諸料。かゝるさまの事ども求め出づるふもか不

おもしろ幸利根の川ふといくうりゆくふ草よひひとくさす
みちのくはと不ーときくをいふふれバとの事をいいてーのふや

利根川圖志卷一終

291

